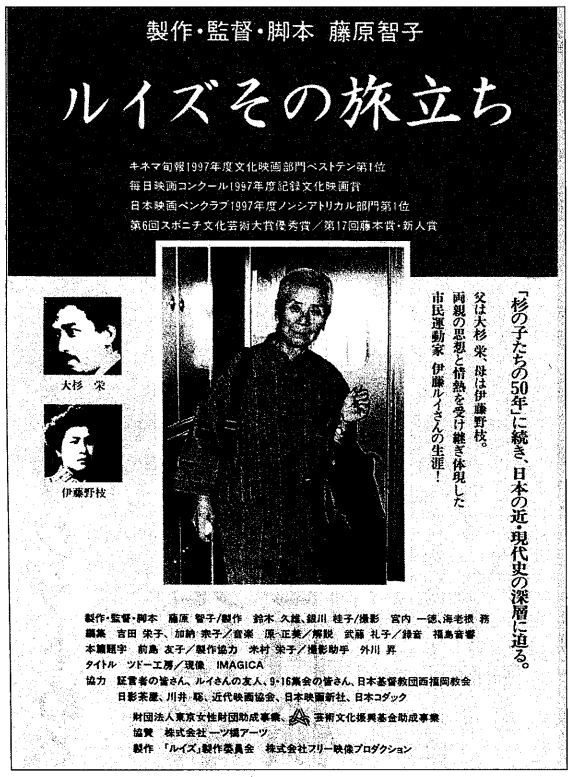
迫害・弾圧をバネに生き抜くこと



映画

『ルイズ その旅立ち』

製作・監督・脚本　藤原智子
1997年／ドキュメンタリー／98分

NHKBSの「悪女伝説」（7月13日）で伊藤野枝を取り上げていた。「原始女性は太陽であった」と平塚らいてうが「青鞜」創刊号で、鮮烈にフェミニズム宣言をした。その後、伊藤野枝が二代目編集長に就任。伊藤は封建的女性支配の根幹を婚姻制度に求め、「結婚制度の廃止」を主張した。平塚と伊藤の間には考え方の違い、溝が広がっていった。伊藤が大杉と出会い、明治支配体制を根本から否定するようになっていったからであろう。

このテレビの放映後、七月一六日、東京江東区豊洲のシビックホールで「ルイズその旅立ち」が、中井厚さんと東京琉球館の島袋陽子さんで組織する「きっかけとなる映画を上映する会」によって上映された。

鎖を断ち切った後半生を追う

一九二二年、伊藤ルイさんは大杉栄と伊藤野枝の四女として生まれた。大杉によって、フランス・パリコミューンで活躍した無政府主義者ルイズ・ミッシェルにちなんでルイズと命名された。一九二三年九月一六日、大震災の混乱に乗じて、大杉栄と伊藤野枝そして甥の橘宗一は甘粕憲兵大尉らによって虐殺された。朝鮮人や労働運動家も大量虐殺された。一九一七年ロシア革命、一九一八年米騒動、一九一九年朝鮮三一万歳独立運動と国内外における政治・民族運動に恐れをなした支配者による予防反革命的大弾圧の一環だった。

ルイさんは福岡の野枝の両親の所に引き取られ育てられた。ルイさんは四〇歳代になるまで、社会運動に関わることはなく、素性も明らかにしなかった。

一九八二年、「ルイズ―父に貰いし名は」（松下竜一著）が世に出てから、飛び放たれたように、自らを明らかにして活動に邁進した。一九九六年六月にルイさんは七四歳、末期がんで亡くなった。

虐殺された両親の真実・生き方

映画はルイさんが亡くなった一カ月後の七月に開かれた「みんなでルイさんを送る会」から始まる。ルイさんの子どもたちや幼なじみ、市民運動の仲間たちによって、人間伊藤ルイがどのような人生を歩んできたかが明らかにされていく。そして、大杉らの虐殺問題が取り上げられていく。両親と甥の殺害がどのように行われたか、その墓の行方について明らかにされていく。橘宗一少年の父による「一九二三年九月十六日、大杉栄、伊藤野枝と共に犬共に虐殺される」と刻まれた墓碑が作られたが、その墓碑は草むらに隠される所にあった。一九七二年、発見された。野枝の墓は一九二四年に建てられ、その大きな石の無名碑（「野枝さんの墓」と村民たちが呼ばれていた）は三度にわたって移動させられた。

一九七六年、大杉ら三人の死因鑑定書が発見された。検死をした軍医が写しを大切なものとして二重蓋の下に、保管していたものを遺族が発見した。それによると、大杉らは連行後、激しい暴行が加えられ、首を絞められ、殺された。麻布にくるまれ古井戸に投げ込まれ埋められた。軍医によってその麻袋の遺体が描かれていた。ルイさんはこの事実を知り、甚だしいショックを受けた。

弾圧された人々の思いを胸に

ルイさんは「朝鮮人被爆者孫振斗さんに治療と在留を！」運動、「九・一六の会」（多くの有名・無名の虐殺された人々、刑死・獄死・拷問死の人たち、話を聞いたりしようという会）を始める。えん罪事件「甲山事件」の救援、東京拘置所が死刑囚にTシャツの差し入れ拒否したのに対して、本人訴訟で提訴。原告団長を引き受ける。一九八三年、松下竜一さん主宰の「草の根通信」に、全国各地の〝草の根〟の人々を訪ねての旅日記がしばしば登場するようになる。市民運動をつなぐネット作りに貢献した。

「水に流してはいけない事がいっぱいあるんです。それをためて人生のバネにするんです」（ルイさんの言葉）。

映画上映後に、大杉豊さん（大杉栄の弟を父にもつ）が大杉らの虐殺の経過を詳しく説明し、ルイさんについて「不正義と闘い、闘い尽して、生き切った人生だった。大杉、野枝にも見せたかった映画だ」と話した。

映画のエンディングはワルシャワ労働歌であった。非常に気分がよく、「がんばろう」、「ルイさん、ありがとう」と口ずさみながら映画館を後にした。

伊藤ルイ著作
「海の歌う日―大杉栄・伊藤野枝へ―ルイズより」講談社
「必然の出会い―時代、ひとをみつめて」記録社
「海を翔ける―阜の根を紡ぐ旅」八月書館
「この世に希望と解放 そして平和の思いを―ルイさんの遺言―」うみの会

なお、「ルイズ、その絆は～関東大震災60年目」（RKB毎日放送、一九八二年）上映会があります。八月七日（水）午後七時～東京琉球館（JR駒込駅東口下車2分、☎03―5974―1333）要予約10人

（滝山五郎）

追悼　前田裕晤さん

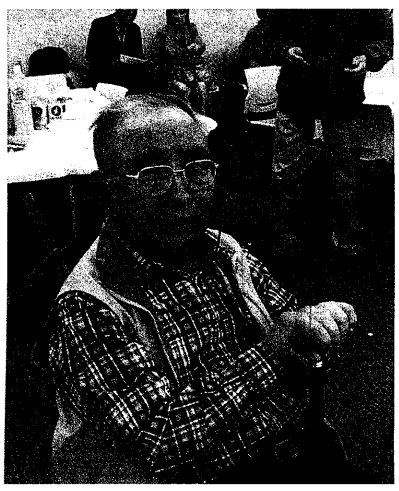
新左翼労働運動の開拓者

さる六月二八日、新左翼系労働運動の開拓者として、大阪中電の闘いを担い、「労働情報」誌の代表も務め、社会主義政治連合の活動を担ってきた前田裕晤さんが亡くなった。享年八四歳。大阪で闘いを共にしてきた本紙の国富建治からの追悼文を掲載します。（編集部）

前田裕晤さんへ

尊敬と感謝を込めて

大阪電通合同労組　平出正人


故前田裕晤さん

前田裕晤さんの告別式が七月一日におこなわれ、通夜と合わせて二〇〇人以上の方が参列しました。前田さんのお連れ合いさんは「最初は家族だけでと思っていましたが、それではいろんな方にお世話になった前田が怒るだろうと思いみなさんにご列席していただきました。たくさんの方々に見送られて前田は本当に幸せ者です」と。

四月二五日に下血し入院していると連絡を受け見舞いに行ったのは五月に入ってからでした。顔が少しむくんだ状態で、体もだるそうにされていた前田さん。その後、体調も落ち着き歩行のリハビリを受けながら頑張っておられたのに。私が前田さんと最後に会ったのは六月一四日でした。その時は笑顔で『元気になって九月の尼崎の集まりに行くからな』と。帰り際ぽつりと「平出いつもすまんな」の最後の一言が今も深く胸に残っています。

本当にお疲れさまと言いたい

前田さんたち大阪中電の先輩が新労組結成の必要性をはっきりと打ち出したのは民営化直前の一九八五年二月労働情報集会電通産別交流会の時だったと思います。

そして年末の一二月八日、全電通と決別し新たな労働組合『大阪電通合同』が結成されました。新労組結成の理由は「全電通は労働組合と認めるわけにはいかない」、「今自らの手で自らを守る労働組合が必要だと考えたから」と。

私は結成に向けた相談会に何回か顔を出した記憶がかすかに残っており、前田さんとの出会いもその頃だったと思います。ただ、結成には参加せず私が電通合同に加盟したのは二〇年近く後のことなので、組合内での前田さんの華々しい経歴はほとんど知りません。

いつごろからだったか、前田さんが私たち尼崎の会議に参加され始めたのをきっかけに親しくお付き合いをさしていただくようになりました。ただ、尼崎の先輩たちはむやみに全国政治に引っ張りまわす前田さんに閉口することもたびたびあったみたいです。

「自分は尼崎の人間だといって文句も言わせない、極めつけは定例会の日を変えろという。理由は、火曜日は近くの中華店が休みだ。そこのワンタンがうまい、芦屋から来て、それを食べるのが大きな楽しみだという。仕方なく日を変えた（先輩の文書を引用）」と、亡くなられた後に先輩からその話を聞いてあっぱれ前田さんと思ったものです。

「俺が着ていた服や。いややなかったら着てくれるか」とジャンパーと衣類も頂きました。ジャンパーを羽織るとほんのりとタバコの香りがしました。前田さんの汗と涙とたばこの香りが沁み込んだジャンパーは大切に着させていただきます。

私が「いくつになっても老いに不満を持たず、自分ができることの中に楽しみを見つけていきたいものです。歳相応に年齢を受け入れて人生を楽しむことができれば最高だと思います」とメールしたところ、「君は誰をさして、自分と対比しているのか？　俺は老いに不満を持っている。君の言葉は、何か悟りきっているように見えるが、まだそれはないだろう」と手厳しい返事をいただいたのは昨年のことでした。

ここ数年は前田さんと一緒に仙台、東京、京都等へ出かけていきました。二人の弥次喜多道中、そのたびにいろんなエピソードを作ってくれた憎めない前田大先輩。もし、組合結成に参加し前田さんと一緒に活動していれば私自身相当ストレスと不満がたまったのでは……。ある意味、いい時期の少し丸くなった前田さんとより良い関係を続けられたことに感謝しています。

最後に組合結成に参加しなかった私を前田さんはどう思っておられたのか聞くことができないのが心残りです。生涯現役として最後まで頑張ってこられた前田裕晤さん、あなたへの尊敬と感謝をこめて、本当にありがとうございました。

社会主義政治連合などの活動

晩年の活動・討論を共にして

国富 建治

「労働情報」誌元代表の前田裕晤さんが亡くなったという知らせを電話で受けたのは、六月二八日の朝、G20大阪サミット抗議闘争に駆けつけるため新幹線に乗っていた最中だった。享年八四歳。

前田さんと私のつきあいは、一回り以上の年の差があるため、前田さんが「労働情報」の代表として東京に来る機会が増え、かつ社会主義政治連合の会議などに新時代社を代表して私が出るようになった一九九〇年代後半以後のことだと覚えている。

最後にお会いしたのは、毎年、前田さんや「社会主義政治連合」を共に担ってきた各政治グループやブント系政治組織の代表たちが二月前後に関西に集まって論議する一泊二日の会議の場だった。今年は二月中旬に京都の宇治市で行われた。

いつも声の大きな前田さんが、今年は「これが俺の出る最後の会議になるだろうな」と話し、健康の不調を訴えていたことを覚えている。翌日、会議が終わった後、平等院の近くの食堂で、向かい合ってよもやま話をしたことが、私にとって彼との最後の思い出となった。その時は、前日とは打って変わったように元気な前田さんの姿を見たと思ったのだが。

大阪中電の闘いが果した役割

前田さんは、一九三四年生まれ。中学を卒業した一九五〇年に通信講習所に入り、講習所終了後、同年のうちに大阪中央電報局（大阪中電）に配属された。当時の大阪中電は朝鮮戦争下のレッド・パージで多くの指導的共産党員が排除された後も、二〇〇〇人の職場に三桁の党組織が再建されたという。戦後の大阪中電の共産党細胞からは、後に党委員長となった村上弘、東京都委員長の浜武司、中央労対部長の荒堀宏といったそうそうたる幹部を輩出した、と聞いている。

そうした共産党の大拠点で前田さんは一九六〇年安保闘争の過程で、ブント（共産主義者同盟）として、共産党から除名されることになった。一九六〇年代、大阪中電は前田さんに代表されるブント系の活動家と、故木村保博さん、伊藤修身さんに代表される第四インターの活動家によって電通労研などの闘いが組織され、西村卓司さんらの三菱長崎造船労組（三組）らとともに新左翼労働運動の一時代を代表する運動が展開された。この活動は一九七〇年代以後の全労活、そして全労協運動にも引き継がれることになった。

現在に続く「労働情報」の運動は、そうした一九六〇年代以後の新左翼労働運動の流れを源流の一つとして受け継いでいる。

私自身、ずいぶん教えられることが多かった。この困難な時代に、つねに希望を求めて闘い続けた前田裕晤さん、どうもありがとうございました。

オリンピック反対

「かけはし」掲載記事

東京五輪招致買収疑惑について（2016.6.20）／「新国立」問題は五輪の象徴（2015.8.10）／東京オリンピックを様々な角度から批判（2014.5.19号）／オリンピック開催返上しろ（2013.10.28号）／やってる場合かスポーツ祭東京（2013.10.14号）

第四インターナショナル第15回世界大会報告決定集に収録

エコロジーと社会主義

エコロジー問題と社会問題の統一／公共サービスの防衛／汚染との闘争／雇用を守るために／土地のための闘争／債務システムの除去／長期展望とデモクラシー

1500円＋税　つげ書房新社